

中間まとめのうち、インタビュー結果を反映する部分（案）

中間まとめ「2 求められる高等学校の方向性」のうち、「ウ 専門高校・専門学科」において、これまでの協議において意見の出ていなかった学科について、事務局がそれぞれの分野の有識者に対してインタビューを実施した。

このインタビューに基づき、事務局において、中間まとめに盛り込む内容（案）を整理した。

ウ 専門高校・専門学科**（農業科）**

（略）

（工業科）

（略）

（商業科）

- ・高校卒業後、企業に就職したときに上司や先輩の指導を受け、一人前の力を身に付けるために必要な基本的な力を身に付ける必要がある。
- ・高等学校では、学力だけでなく社会に出て自立するために何が必要かを自覚する取組が必要である。例えば、コミュニケーション能力や言葉遣いなど基本的なマナーも指導した方がよい。
- ・大学へ進学するための学力と社会に出て自立するための力をきちんと身に付けるために、専攻科の設置も検討してはどうか。
- ・商業に関する資格はもちろん、その他の資格も幅広く取得するという発想があっても良いのではないか。
- ・良い専門性を身につけるという意味で、大学進学をすることは良いと思う。
- ・商業科の中で、ファイナンス（金融）をもう少し扱うべきである。
- ・広島の良いところを知り、広島で（特に中山間）業を起こし、広島を元気にできるような子どもを育てるべきである。

（家庭科）

- ・家庭科では、自分の生活を豊かにすることと社会に貢献することの二つを目指す。今の子どもたちは、家庭でのお手伝いなど生活体験が不足しているからか、基本的な生活習慣、生活技術が身に付いていない。
- ・高等学校教育の中で、生活者の意識、生活者の視点を社会との関係（例えば、消費生活と環境との関係）から家庭科を学ぶ意義を考えさせることが重要である。また社会貢献を体験できる企業等と連携した取組を進めてはどうか。

(看護科)

- ・医療現場において、看護の自律が必要となり、看護師には判断力や説明力が求められるようになった。
- ・高等学校において、部活動や他者との交流活動などを通して、まずは、コミュニケーション能力、また英語や数学、国語などの教科におけるバランスの良い力を身に付ける必要がある。
- ・衛生看護科では、消化器系や循環器系など専門性の高い実習を急性期病院で行うことが難しく、看護基礎教育の充実が必要である。

(福祉科)

- ・「福祉科」は、どの生徒も共通して学ぶべき人間の生き方に係る教科であり、必修にすべきであると考ええる。
- ・福祉を支える人材には、しっかりとした自己の上に、福祉的観点を持つ必要がある。また人への支援を行うために、福祉を裏付ける基礎的・基本的な内容の習得とともに考える力、応用する力が求められる。
- ・高校内の学習活動だけでなく、実習等で社会体験を積むことにより自己肯定感や他者を尊重する心、状況に応じて考え行動することを学ぶ必要がある。
- ・介護福祉人材の不足という社会的な課題に対して、現在の人材育成の体制は十分とは言えず、福祉科以外の生徒にも福祉的観点を育成する取組を行なうことや、都市部への福祉系高校の設置も含め、対応を検討する必要がある。

(体育科)

- ・最近の高校生には規範意識の低下が見られる。また体育科の学生の多くは大学卒業後、教職や一般企業へ進む中で、企業では協調性や忍耐力だけでなく、考え、企画することのできる「知的な体育会系」を望む傾向がある。
- ・スポーツを学ぶ中で、社会がルールや規範を守ることにより成り立っていることを学ぶことができる。
- ・高等学校段階の体育では、技術面だけでなく体育理論や運動・スポーツにかかわる科学的な理論をふまえた学習が大切であり、将来を見据えて今の自分の状況を認識し、不足しているものは何か、どうすれば強化できるかを考え、それを行動に移すというサイクルや手法を身に付けることが重要である。

専門学科（商業・家庭・看護・福祉・体育・国際）に係る
有識者へのインタビュー実施状況

学科	氏名	所属等	実施日
商業	川口 護	株式会社デイ・リンク 代表取締役社長	11月14日
家庭	鈴木 明子	広島大学大学院教育学研究科 (人間生活教育学講座) 准教授	11月5日
看護	板谷 美智子	社団法人広島県看護協会 会長	11月9日
	小山 真理子	日本赤十字広島看護大学 学長 研究科長, ヒューマン・ケアリングセンター長	(※1)
福祉	菅井 直也	広島文教女子大学人間科学部 教授 (併) 大学院人間科学研究科人間福祉学専攻主任	11月5日
	廣山 初江	社団法人広島県介護福祉士会 会長	11月5日
体育	東川 安雄	広島大学大学院教育学研究科 (生涯活動教育学専攻健康スポーツ科学講座) 教授	11月14日
国際	調整中 (※2)		

※1 看護科の小山真理子氏へのインタビュー概要については、現在整理中

※2 国際科については、近日中にインタビューを実施する予定

1 実施日

平成24年11月14日(月曜日)

2 インタビュー対象者

株式会社 デイ・リンク 川口代表取締役社長

3 概要

(最近の高校生を見てどのように感じているか。)

- ・中小企業家同友会で採用した新人は研修におけるグループ討議で、結構、きちんと主張することができていると感じる。
- ・店長や上司から素直に学ぶことのできる新人は、社会に出て何が必要かすぐに掴むことができる。そういう態度がきちんと身につけていけば、大丈夫であるという印象を持った。
- ・学校教育では、社会性、言葉遣い、礼儀、マナーなどをきちんと指導したほうが良いと思う。これは、商業高校の生徒は日ごろマナー教育をしているので気にならないが、普通科の生徒で、家庭の事情等で、急に就職せざるを得なくなる場合もあり、どんな学校でも指導しておくべきだと思う。
- ・商業高校の授業は、社会に出て、自立するために何をしないといけないのかということが、教育の中に組み込まれているということである。
- ・5年制(専攻科)があったら良いと思っている。

(高等学校で、身に付けてほしい力はどんな力か。)

- ・子どもに剣道を教えてきて30数年になる。人の話は、「目で聞け」とか、姿勢、礼儀等はきちんとやっておこうと指導している。人間としての謙虚さとか、剣道を通しての思いやりとか、試合後に「ありがとうございました」という意味は、何か等である。試合の中で感じることも、小中での在り方、土台作りが延長できるように指導している。小中で作った土台を高校でバトンタッチしていくような教育が大事であると思う。
- ・林業、農業、漁業の話があるが、魚も山が荒れたら、良いものは育たない。そのような一貫のもの、「連鎖」というものが、教育でも大切なのではないだろうか。また、その子の得意なもの、そういった特性が伸ばせないかということである。教育委員会の教育委員さんとも話をするが、授業中に居眠りしている生徒に、早く「道」を示すことができれば、その生徒の特性が伸びていくものと思う。

(広島商業の生徒を見て、できていることとできていないことがあるか。)

- ・かなりきちんとしたものができていると思う。

(資格取得にも力を入れているが、そのことについてどう思うか。)

- ・いろいろな商業の資格があるが、何か偏っていると感じる。礼の作法が、その中に組み込まれているので、例えば、柔道や剣道などの資格(初段くらい)などがほしい。剣道の技術だけではなく、自分の健康管理や姿勢等、生徒が武道を理解していると、採用する側は安心感がある。武道などは外国人からも評価されているし、対人関係としては、良いものがあると思う。

(商業科で身に付けるべき力は何か。)

- ・「読み」・「書き」・「そろばん」である。文章を書くのも、広商の生徒は、結構きれいですよ。
- ・「2進法」の考え方は有効である。

(商業科の生徒が、大学進学が、6割くらいであるが、このことについてどう思うか。)

- ・上級学校へ進むのは望ましいと思う。

(高校の商業科でもっと、新しいことをやったらどうかというものがあるか。)

- ・例えば、「ファイナンス(金融)」。「ファイナンス」の授業をやってもらうように進言してほしい、という話があった。「ファイナンス」の授業を受けて、将来その道に進みたいという者が出るようにしてほしいというものであった。また、「企業診断士」、「販売士」の資格も取らせる必要があると思う。この資格の取得はかなり難しいが、中小のスーパー等では、利益を上げるために細かな分析が必要である。この資格を身に付けたり、或いは勉強をしていたら、かなり実践に役立つものと思う。

(広島に目を向けて、商業に限らないかもしれないが、どのような人材を育成すべきか。)

- ・広島の良さを知ることである。
- ・高野町の農業は、素晴らしいものがある。自分で値段をつけるような農業にしないとだめだと思う。農業をしている人は、お金のことを気にしないというが、そろばん勘定がないと、安心して仕事ができないと思う。
- ・ドイツで環境教育をしているが、環境を守りながら、ビジネスが十分成り立つことを教えるべきである。
- ・地元に戻ってもらえるような人材を育てることが大事である。そういった意味での学校に行ったら、何が身に付くのかわかるような学校をつくってほしい。

(早期に離職していく生徒は、何がミスマッチだったのか。)

- ・個人面談をしてみて感じるが、離職した者の主な理由は私的な理由が多い。人間として大事な部分(倫理性)をしっかり身につけていない子が続かない傾向がある。逆に長く続く者は、そのあたりがしっかりしている。
- ・県立広商の生徒は、受け入れると社員からも高い評価を得た。入社してよくやってくれている。定着率も高い。結婚後、出産後、復帰するようなことになればよい。そういうことができると会社も安心できる。

1 実施日

平成 24 年 11 月 5 日（月曜日）

2 インタビュー対象者

広島大学大学院教育学研究科鈴木准教授

3 概要

（最近の高校生を見てどのように感じているか。）

- ・子どもたちに生活体験が不足しており、家庭科を学ぶことの重要性が増していると思う。そのことは、家庭科の教員を養成する際にも感じることで、これまでは家庭で身に付けていたと思われる習慣や生活技術が身に付いておらず、その体験不足を補うことから指導するのを感じている。その背景には、教員（管理職、他教科）や保護者に家庭科という教科の重要性が認識されていないことがあるのではないかと思う。
- ・バランスの取れた「知」をとらえていく上で、生活者としての「知」を組み込むことは不可欠である。それは状況に応じて判断したり、物事の関係性を捉えたり、複数の価値を吟味して総合的に判断したりすることにかかわる「知」である。そのような「知」が若者に非常に不足している。将来を見据えて、①生活者の意識、②生活者の視点を育てることが必要である。しかし、子どもたちの背景には家庭教育の課題が存在する。
- ・家庭科で、社会との関係から家庭生活（例えば消費生活や環境とのかかわり等）を問い直すことが重要である。

（家庭に関する学科について）

- ・生徒の普通科志向が高いのは理解しているが、それぞれの特性を生かして、生徒の興味・関心を引き出す指導を行う学校もある。

（家庭に関する学科では、これからの専門教科「家庭」を考えるうえで、良い参考となる取組があるか。）

- ・企業と連携して商品開発する取組がある。
- ・教科「家庭」の目標には、①生活者として自立することと、②生活者の視点をもって社会に貢献する、という二つの点がある。生活者の視点を組み込んだ起業も生まれてきている。

（教員養成の面で、難しいことはあるか。）

- ・先ほども触れたが、学生は家庭での生活体験が少なく、生活する上で必要な基礎が十分でない。この一因として、学生たちが小中高で学んできた家庭科教育の未整備の問題もあると思う。力量のある家庭科教員を育てるためにも、教科の時間数の確保（「家庭総合」4単位の必修化）と適切な教員配置を考えていただきたい。

（家庭科を学ぶ上での課題及び重要なことは何か。）

- ・本当に子どもが抱えている課題を解決するために、それが何であるかを探求するために、学習指導要領との兼ね合いはあるが、もう少し、教える内容や研究主題等に独自性や自由度がほしい。家庭科を学ぶ上で重要なことは、生活のベースづくりである。そのためにも保護者や地域社会が学校と一体となって生活者としての学びや発達が重要であることを認識することが必要だと考えている。

1 実施日

平成24年11月9日（金曜日）

2 インタビュー対象者

広島県看護協会 板谷会長

3 概要

（将来、看護師を目指す生徒、広島皆実高校衛生看護科も含めて、どのように考えるか。また、最近の高校生を見てどのように感じているか。）

- ・我々、職能団体である日本看護協会としては、看護師は大学で養成することが望ましい、と考えている。以前と比べて医療現場は変化してきており、「看護の自律」が必要で、判断能力があらゆる場面で求められる。
- ・（広島皆実高校）衛生看護学科については次のような感想を持っている。
 - ① 国家試験合格率等の客観的な数字においては、他の看護養成機関とも遜色がない。
 - ② 「衛生看護学科」の生徒は、素直で、良い子である。
 - ③ 高校の教員も熱心に指導をしている。
 - ④ 県内に多数、就職する。
 - ⑤ 実習に出るときに、看護に関する基礎学習がどこまでできているのかというのが気がかりである。他のレギュラーコースに比べると問題を感じる。看護の基礎教育が大切であり、今の制度でどうすべきかを私自身が考えても実態としては、難しいのかなと感じる。
- ・最近の高校生が、以前と比べると、大人になっていない、と感じる。看護系の大学に入って4年間のなかで教育することでも大変である。
- ・考える力とか、判断能力とか、そういった力を付ける教育が大切であると、医療現場から聞く。
- ・臨床現場で大学卒業後の看護師が入職すると、3～4年後には、他の教育課程の卒業生より随分と成長してくる。教育の力を感じている。
- ・衛生看護科では、普通教科の単位数が少ないのではないかと感じている。
- ・高校時代には、クラブ活動、他との交流、コミュニケーション能力等の力をしっかり身に付けてほしい。人として、大人になる（成長する）、人格形成する重要な時期に、専門教育が入るために、普通教育がおろそかになる部分はどうしたらよいのかな、と思う。
- ・衛生看護科は早い時期に、看護師の資格が取れる反面、医療現場に出た際、エビデンス（根拠）、フィジカル（肉体）、アセスメント（評価）をもって患者一人一人の状態を判断し、どのようなケアをするか、というベースの部分が十分でないと考える。
- ・皆実の生徒の場合は、医療現場で新人教育をするときに、少し丁寧にしないといけない、と聞く。

（看護師になるために必要な力は何か。）

- ・考える力、書く力、自分の気持ちを伝える力、コミュニケーション能力等、トータル的に複合的な力が必要である。医療現場では、医師の指示に基づいた医療行為と看護師の判断による「自律した看護」が出来ること、他者と良好な人間関係が築ける力等が必要となってくる。

（このような実習が必要ではないかとか、ぜひ高校で実施すべき取組について）

- ・高校生が実習に行ったときには、コミュニケーション能力・看護基礎教育の不足から困難さが多くある。
- ・大きい病院での実習、急性期（※）及び消化器系、循環器系の実習は、なかなかできていない、そこが課題ではないか、と考える。

（普通科に在籍して、将来、看護系大学に入るような生徒が、高校時代にどのようなことが必要か。）

- ・普通の高校生活を送れる、バランスの良い、偏りのない高校生活である。英数国などの教科をしっかりと学習し、クラブ活動等もしっかり取り組むことである。
- ・基礎ができたうえで、そのうえで専門職としての教育が行われ、職業人としての自覚が芽生えていけばよい。

（これからも看護の人材は足りないか。）

- ・足りないと思う。看護職確保対策については、県にもお願いしている。看護の現場はハードで、女性が多いし、離職率も高い。看護協会としても、専門研修の充実と共に確保対策の事業を重点的に進めている。

（普通科から看護系大学等へ進学する生徒や、高校の看護科で資格を取るといった、色んな選択肢があることは、生徒にとっては望ましいことと考えているが、どうか。）

- ・基本的に看護師教育は高卒後に大学教育（専門職教育）として実施されることが望ましいと考える。
- （※）急性疾患や慢性疾患の急性増悪などで緊急・重症な状態にある患者の状態（出典「大辞泉」）

1 実施日

平成 24 年 11 月 5 日 (月曜日)

2 インタビュー対象者

広島文教女子大学人間科学部人間福祉学科 菅井 直也教授
(併) 大学院人間科学研究科人間福祉学専攻主任

3 概要

(教科「福祉」について)

- ・教科「福祉」は、人間の尊厳をそのまま問いかける教科である。現実の社会の中で生起している、貧困、いじめ、引きこもり等、また、保育園から老人ホームまでの人間のライフサイクルは、教員にもあることで、それらが、すべてこの教科の題材となっている。
- ・福祉を目指す生徒は、生活的に苦しい家庭から進学してくる生徒が比較的多い。シングルマザー等の保護者自身の経験や中卒で仕事を見つけるのは難しいという経験から、資格を得て少しでも収入の高き仕事につきたいという思いから入ってくるが、生活の現実には耐えられなくなり、中退率も低くはない。
- ・保育園や施設等の実習を通して、生徒が、自己肯定感が持てるようになっていったら、教科「福祉」が、生徒の成長に生きてくる教科になる。したがって、教科「情報」と同様に、全ての生徒の必須教科になるべきである。

(本県では、1校1学科福祉科があるが、更に資格を取るためのハードルが上がったが、このことについてどう思うか。)

- ・高校生の年齢で、介護福祉士の養成をすべきではないと思っている。ただ、黒瀬高校に1学科あるからといって、役割を果たしているといえそうとはいえない。保護者の経済的要請に応える意味で、都市部に何箇所かあるべきだろう。

(高校時代にどのような力を身に付けるべきか。)

- ・社会系科目についてしっかり学習してほしい。

(介護福祉士の人材不足という現実があるが、高校で介護人材を養成する学科に反対ということであったが、その理由は何か。)

- ・社会生活を5年、10年経験するということなしに、お年寄りや子どもと接するなかで、ただ関わっていれば良いというものではない。高校という学校生活だけで培ってきたことだけでできるものではない。

(黒瀬高校福祉科の場合、介護福祉士の受験資格を全員に取らせる取組を進めているが、先生からは、それも含めて「福祉のこころ」を中心に据えた、黒瀬高校全体の学校づくりをしていくのがよいのではないかという御意見をいただいたと理解したが、それでよろしいか。)

- ・それで良い。平成15年に教科「福祉」が必修になれば良いと思ったのは、そのような理由である。福祉科があることで生徒が成長し、学校全体がそういう雰囲気になって、例えば、生徒の逸脱行動が減少したということがあれば素晴らしいと思う。

(「介護福祉士が足りない」という社会的な課題に対して、福祉科でしっかりとした福祉・介護人材を育成したいと考えているが、どうか。)

- ・広島県は、介護福祉士を養成する専門学校には、受入れの余裕がある。どういう人材を育成するかということよりも、高校を卒業できる生活を保障することの方が、先ではないか。退学理由のほとんどは、経済的な理由である。

- ・教科「福祉」は (を学ぶことによって)、

- ① 高校の将来像には、キーになる教科である。
- ② 生徒・保護者の背景を踏まえた、生徒指導、進路指導が可能になる。
- ③ 先生たちの精神面をサポートすることができる。

以上である。

(社) 広島県介護福祉士会 廣山会長 インタビュー概要

1 実施日

平成 24 年 11 月 5 日 (月曜日)

2 インタビュー対象者

社団法人広島県介護福祉士会 廣山会長

3 概要

(高等学校福祉科生徒に係る課題について)

- ・基礎学力がない。介護職は、入口は幅広くあってもいいが、出口は狭くあるべきだ。福祉は、心だけではなく、考える力、応用する力がないと人への支援ができない。
- ・マナーができていない。人に接する際には、それなりのマナーが大切である。死に行く人、終焉を迎える人に対してきちんとしたマナーを身に付けておくことが必要だと思っている。

(高校卒業後、福祉の道に行く人が、身に付けるべき力について)

- ・専門学校で生徒に接する機会があるが、
 - ①人間性の豊かさ
 - ②きちんとした自己
 - ③人の価値観をきちんと共有できる人
 - ④自分の意見は持ちつつも、人の価値観を受け入れる柔軟性が必要。場合によっては、意見を修正できる力が必要だと思う。

(高校でどのような取組をすべきかについて)

- ・高校の取組でグループワークがあるが、(※) グループワークで議論をしていく中で力を付けていくことが有効である。受身でなく自分を発信することが大事な社会であり、教えられるものではなくて、自分で身に付けていくものである。

(本県では、福祉科に関する学科を黒瀬高校福祉科に、1校1学科を設置している。それについてどう思うか。)

- ・福祉科の在り方については、特にコメントはない。まずは、どの学校においても先ほど述べた身に付けるべき力を付けてほしい。人間としての育ちが必要であり、豊かさが必要である。介護技術は、あとでも良いと思っている。現在は高校にほとんどの人が進学する。人間を育てることを高校がやっていくべきである。

(この度の法改正があり、介護福祉士の受験資格を得るのは、高校生には厳しいものになっているがどのように考えるか。)

- ・幅広い人材の確保は必要だが、質の向上が必要であり、当然、良かったと考えている。

(※) グループワーク

【類義語】 小グループでの話し合い活動 (広島県教育資料 P 19 から抜粋)

1 実施日

平成 24 年 11 月 14 日（水曜日）

2 インタビュー対象者

広島大学大学院教育学研究科東川教授

3 概要

（最近の高校生を見てどのように感じているか。）

- ・規範意識が下がっている。大学でも 2 年くらい前から、規範意識に関する学習の場を設けなければならなくなった。スポーツをやっているならば、ルールを守るのは当たり前である。
- ・高校の陸上競技の大会などを見ると表面上は、きちんと指導を受けているように見えるが、大学に入ってくると、非常に幼稚になる。自らコントロールする力が弱い。
- ・枠の中では力を発揮するが、一定レベル以上のものに対して枠を破って挑戦し、自分で考えていけないものに対しては苦手意識がある。
- ・自分で考えることができていない。一時、学校が荒れて大変な時代があったが、むしろ、その頃の方が、たくましかったかもしれない。非常に行儀が良くなったが、ある意味で面白みがない。

（体育科で学ぶ生徒の将来の進路をどのようにイメージされているか。）

- ・プレイヤー、指導者になる者もいるが、スポーツ関連産業に進んでいく人は、それほど多くはない。やはり、教員や一般企業が多い。
- ・1970 年代から 1980 年代にかけては、協調性や忍耐力を身につけた体育会系の気質が企業から歓迎されたが、2000 年代になると、「知的な体育会系」を望む声が出てきた結果、「バンカラ」や昔ながらのたくましさはなくなった。一見、知的に見えるが、中身がない。

（体育科で学ぶべきものについて）

- ・スポーツを学ぶに当たって、他の教科と違って、①スポーツはルールや規範から成り立っていること、②みんながスポーツを楽しむためにはその順守が大切であること、③フェアネスの重要性をしっかりと学ばせるべきである。
- ・中学生が高等学校を選ぶときに、クラブ活動が結構、大きなウエイトを占める。あの高校に進むと、①力量がつく、②活躍する場を見つけてくれる、③地域にも積極的に関わり、卒業後も継続していく、ということになる。高校生では、技術面だけでなく、体育理論が大切になる。
- ・高校生は、将来像を描きながら、そこにどういう意味があるのかを考えられる時期である。

（生徒や学生の運動能力等の状況についてはどうか。）

- ・実技力のレベルが著しく下がっている。1980 年代に学習指導要領が、それぞれの個人の楽しさに重点が移ってきた。一人ひとりのめあてにそってスポーツの楽しさの味わい、個性が重視されたことはある意味で良いことだが、一方でスポーツをする生徒とまったくしない生徒の二極化現象が現れ、特に高校生でその傾向が強い。そのためか、大学に入ってくる専門の学生でも、逆上がりができない者もいる。

（体育科で才能を持った生徒を更に伸ばすためには、どのような取組が必要か。）

- ・「自分で考える」ことが重要であり、①なぜ、この練習をするのか、②自分に足りているものと足りていないものは何か、を考えて、次の行動に生かす、といったところを育てることが大切である。
- ・「アスリートとしての自立」に導く指導が大切である。今の自分を受け入れて、枠を破っていくと必ず、伸びていく。
- ・①基礎になる力、②競技特有の力、③体のメカニズムなどの科学的な知識やトレーニングを身に付けた学生は、良かったといって大学を卒業していく。高校もそういった次につながるような力を育てることができればよい。